

Diagnostic accuracy of transient hepatic attenuation differences on computed tomography scans for acute cholangitis in patients with malignant disease

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉下, 敏哉 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31331

主論文の要約

Diagnostic accuracy of transient hepatic attenuation differences on computed tomography scans for acute cholangitis in patients with malignant Disease

悪性疾患に発生した急性胆管炎の CT 動脈相による診断能の検討

東京女子医科大学消化器外科学教室

(主任：山本 雅一教授)

杉下 敏哉

Journal of Hepato-Biliary-Pancreatic Sciences Volume 21, Issue 9 2014

Page 669-675 掲載

【背景】

急性胆管炎の診断の際、Dynamic CT の早期動脈相において胆管周囲の肝実質が特徴的に濃染することは Transient hepatic attenuation (以下 THAD) と表現され、さまざまな論文で引用されている。今回、われわれは、悪性疾患における急性胆管炎の THAD による診断能の検討を行った。

【対象および方法】

2006 年～2011 年までに当施設にて胆道ドレナージを行い、かつ胆道ドレナージの 3 日以前に CT 動脈相撮影を施行した悪性疾患 123 例（男 73 例、女 50 例、平均年齢 69 歳）を対象とし、THAD による急性胆管炎の診断能及び THAD と急性胆管炎の重症度との関連性を検討した。なお、急性胆管炎は、胆管局所の炎症（発熱 37.5℃ 以上、CRP ≥ 1.0 mg/dl あるいは白血球数 $\geq 10000/\mu l$ ）をみとめ、ドレナージにより症状の改善したもの、あるいは、血中、胆汁培養にて菌が検出されたものと定義した。

【結 果】

急性胆管炎は 45% の症例にみられ、THAD による急性胆管炎の診断能の感度は

93%、特異度は 39%であった。胆管炎群 55 例のうち、THAD の CT 所見分類としては、びまん型が 84%、文節型が 4%、限局型が 9%であった。また、胆管炎群のうち、胆管周囲の肝実質がはっきりと濃染され THAD として認めたものは 64%、肝実質がわずかに濃染され THAD として認めたものは 29%であり、THAD を全く認めなかったものは 7%であった。なお、THAD の CT 所見分類と急性胆管炎の重症度には相関はみられなかった

【考察】

THAD の有用性はさまざまな報告があるが、THAD を使用した、急性胆管炎、特に悪性疾患に関する検討はされていない。胆管炎群において、THAD は発熱、CRP が高い群に有意に認められ、炎症のあるものに THAD は認められやすいと思われた。また、感度が 93%である点からも、悪性疾患における THAD は 急性胆管炎の診断に有用であると思われた。一方、特異度が低い点に関しては、急性胆管炎の定義によるものや、非胆管炎群において THAD は CRP がわずかに高い群で有意に認められており、THAD は炎症のあるものに認めやすい点が原因であると考えられた。また、THAD 所見と急性胆管炎の重症度に相関がみられなかった点に関しては、母集団の数が少ない点や、後ろ向きの検討である点、術前や再発、非切除例などさまざまな悪性疾患が含まれていた点などが考えられた。

【結論】

THAD の CT 所見分類と急性胆管炎の重症度には相関はみられなかったが、THAD は急性胆管炎の診断に有効であると考えられ、急性胆管炎の診断基準になりうると考えられた。